

思考力・判断力・表現力の育成をめざす社会科学学習 — 社会的現象を評価する活動を通して —

藤井 健太郎*

Social Studies aimed at the development of thinking, judgment, power of expression — Through activities to assess the social phenomenon —

Kentaro FUJII*

【要旨】

社会科における思考力・判断力・表現力の育成をめざす授業の在り方について、実践例をもとに提案する。具体的には、評価学習という社会的現象について二次元軸表を活用して評価する学習を位置付ける。たとえば、中学校での地理的分野「日本の諸地域」の学習において、徳島県上勝町のいどり事業や京都市の新景観政策、岩手県の南部鉄器、北海道の酪農での実践を取り上げる。これらの事業や産業は、時代や地域社会の実状にあわせて新たな取組を行っていること。また、それに対して多様な見方や考え方があり、生徒が十分に思考できると考えた。評価後には、その理由を小論文に書くことも位置付け、表現力の育成につなげていく。その場合、ルーブリックを示すとともに、書き方の型を示していった。ルーブリックの数値や定期テスト等の結果からは、思考力・判断力・表現力の高まりがみられるようになったことが確認でき、評価学習には一定の効果があると考えられる。

キーワード：評価学習，二次元軸表，ルーブリック，書き方の型

1. はじめに

経済協力開発機構（OECD）が実施する国際学習到達度調査（PISA）のわが国の結果が、2003年、2006年と続けて低下し、教育の見直しが議論されはじめた。とくに、応用力や読解力など思考を要する力。また、思考したことを論述する表現力に課題がみられることが明らかとなった。こうした課題を受けて、学校教育における指導の在り方も見直しが図られることとなる。学習指導要領では、「基礎的・基本的な知識及び技能を確実に習得させ、これらを活用して課題を解決するために必要な思考力、判断力、表現力その他の能力をはぐくむ」こと

が明示された。思考力・判断力・表現力等の育成は、大きな柱の一つとして位置付ける。日々の授業をはじめ教育活動全体を通して、思考や判断、表現する活動を積極的に展開していくことが求められている。

しかし学校現場では、そのための授業開発が十分に進んでいるとは言い難い。とくに、思考力・判断力・表現力の育成をめざした学習活動が、もっと積極的に行われるべきだと考えている。おそらく、授業開発が十分に進まない背景には、学校が抱える問題が多いこと。そして、仕事が多岐にわたるためだと思われる。各教科の指導内容の増加や教科指導以外の事務処理、発達に障害を抱えた生徒への対応、

*ふじい けんたろう 関ヶ原町立今須中学校

部活動による勤務時間の長期化など、複数の要因が絡み合っている。また現代は、知識基盤社会といわれるように知識の習得も欠かせない。そのため、基礎的・基本的な知識の習得を図るために繰り返し練習問題に取り組ませ、知識の定着を図ろうとする学習活動が増している。各種の学力状況調査が頻繁に実施され、結果が公表されるようになったためであろう。

さらに、思考力・判断力・表現力を育成する具体的な学習活動の先行事例が少ないことも背景にある。学習指導要領では、思考力・判断力・表現力という3つの力が並列に表される。それは、「児童生徒の学習評価の在り方について（報告）」（2010）に示されているように「思考・判断したことを、その内容を表現する活動と一体的」として捉えて学習活動を実施する必要がある。そのことに対して、難しさを感じる教員も多いのではないだろうか。それゆえ、従前の学習形態を踏襲するにとどまり、新たな授業開発につながっていかない。そして、知識や技能の習得のみに偏重していく。私は、思考力・判断力・表現力を十分に高める学習活動を積極的に導入していくことが、今の教育現場に必要であり、課題だと考えている。そして、そのための新たな授業を模索し、提案したい。

2. 新たな授業提案 — 評価学習 —

私は、中学校において社会科学を教えている。社会科学を通して、思考力・判断力・表現力の育成を図っていく。そこで、評価学習という新たな学習活動を取り入れる。評価学習とは、社会的事象や産業を生徒が評価する学習のことで、主に地理的分野の学習での導入を目指す。二次元軸表を活用し、資料から調べたことをもとに評価する。縦軸と横軸の2つの視点を設け、その視点に照らし合わせて評価点を選ぶ。このとき、一つの視点からではなく2つの視点から社会的事象を評価することで、多面的・多角的に思考する力を育成したい。この多面的・多角的に思考することは、学習指導要領における社会科学の目標としても示されている。また、評価点を1点選ぶことは、判断が迫られることでもある。これまでの社会科学習において、この判断を迫るという場面は、あまり見られなかった。しかし、判断を迫ることでより思考が促されるのではないかと考える。誰しも選択を求められるとき、思考する。たとえば、商品の購入を選択する場面においても価格や必要性、デ

ザイン、長期使用など考えるべきことは多い。諸条件を総合し、自らが最善だと思う選択をするのである。現代社会は、この判断が迫られる場面の連続ではないだろうか。社会科の学習においても判断を迫る場面を設定することは、将来にわたって必要な活動だと考える。そして、思考・判断したことを表現していく。思考・判断したことには、必ず理由がある。その理由を論理的に書いて、表現する力を付けていく。そのために、表現する十分な時間を確保すること。さらに、表現の型を示すことが必要だと考える。思いつくまま羅列的に書いても、読み手には伝わらない。論理的に書くことは、他者に理解してもらうことでもある。それこそが、表現力ではないだろうか。そのための書き方の型は、不可欠だと考える。書き方など表現の型を基盤とし、自らの考えを表現する力を育成していく。

評価学習は、思考・判断した内容を表現する一体的な学習活動であり、定期的実施することで着実な思考力・判断力・表現力の育成につなげる。一度きりの学習活動では、学習効果は期待できない。定期的に位置付け、継続することで3つの力は育まれると考える。

3. 具体的な実践例

社会科の地理的分野「日本の諸地域」の学習における評価学習を例示する。なお、実践例は平成26年度である。評価学習には思考を要する社会的事象が不可欠であり、多様な見方や考え方が含まれることが求められる。まず、評価学習となり得る社会的事象を選ぶことから始める。「日本の諸地域」の学習では、地域ごとに主題となるテーマを設定し、地域の特色をとらえる動的な視点をもとに学習を進める。たとえば、近畿地方の場合、京都、奈良に代表されるように歴史との深い関わりをもつ。それゆえ“歴史とのつながり”という視点から地域の特色をとらえていく。このように、日本の諸地域の中から動的な視点を踏まえ、かつ評価学習と成り得る社会的事象を表1のように選んだ。これらの事業や産業は、時代や地域社会の実状にあわせて新たな取組を行っており、多様な見方や考え方があふれている。十分に思考できると考えた。なお、評価学習は単元末に位置付ける。

表1 日本の諸地域における評価学習の社会的事象

地方	動態的な視点	事業
中国・四国	都市・村落	いりどり事業
近畿	歴史	新景観政策
東北	伝統	南部鉄器
北海道	農業	酪農

以下に、具体的な評価学習の実践例を述べる。

①「いりどり事業」を評価する

中国・四国地方の学習では、瀬戸内海に面した都市部と山間部との格差。とりわけ、人口の過密と過疎の問題をテーマとした。徳島県上勝町は山間部地域にあり、65歳以上の人口が町全体に占める割合が50%を超える。中国・四国地方の中でも、もっとも高齢化率の高い自治体の一つである。この上勝町において注目を集めているのが、いりどり事業である。料亭などで給される数々の料理に添えられ、季節感を演出する木の葉など「つまもの」を出荷している。過疎の町にあって収益を上げるとともに、高齢者の雇用にもつながる。いりどり事業が地域で担っている役割を通して、過疎の問題を考えさせていきたい。なお、評価学習は表2のように「評価する」ことと、「小論文を書く」ことで、それぞれ1時間ずつ時数を確保する。しかし、場合によっては事前段階において、評価する社会的事象について生徒に調べさせることもある。その場合は、3~4時間の構成となる。

表2 評価学習の進め方

時	学習内容	方法
0	調べ学習	文献等
1	評価する	二次元軸表
2	小論文を書く	小論文

まず導入では、上勝町といういりどり事業の概要について説明する。人口や高齢化率、いりどり事業の内容などを端的に伝える。つぎに、配布資料をもとに生徒一人一人が評価をする。図1は、その様子になる。プリント内の二次元軸表に1点●印を付ける。このとき、縦軸を「地域社会への貢献」、横軸を「利潤」という2つの視点を設けた。公民的分野において、企業の在り方を学ぶ。企業は利潤を追求するとともに、地域社会への貢献も担う。その点もふまえ、視点を設定した。



図1 二次元軸表に評価する生徒の様子

そして、個人での評価をもとにグループでの評価を決める。個人と仲間の意見は、異なる。その異なった意見を一つに集約する過程で、さらに思考が深まると考える。また、一人では気付かなかった新たな考えも獲得することができる。図2は、あるグループでの話し合いの様子になる。ホワイトボードに意見を書き出し、評価点を決めている。このグループは4名であるが、意見を集約することは難しく、労を要する姿が見られた。しかし、仲間を納得させる根拠を示すことや仲間の意見への質問などを通して、結論を導き出した。



図2 グループでの話し合いの様子

図3は、あるグループが話し合った内容である。「地域社会への貢献」という視点では、高齢者の出荷や販売が楽しみという意見や、事業によって若者のU、Iターンが生まれ、過疎化の抑制にもつながるといった意見が出された。また「利潤」という視点では、売上が順調に上がっている点は評価できる。しかし、他の事業者の新規参入があることも考慮した。競争が生まれ、利潤の減少につながる可能性もある。話し合いの結果、このグループではいづれ事業を(6, 8)と評価した。ここまでの、第1時の学習内容である。

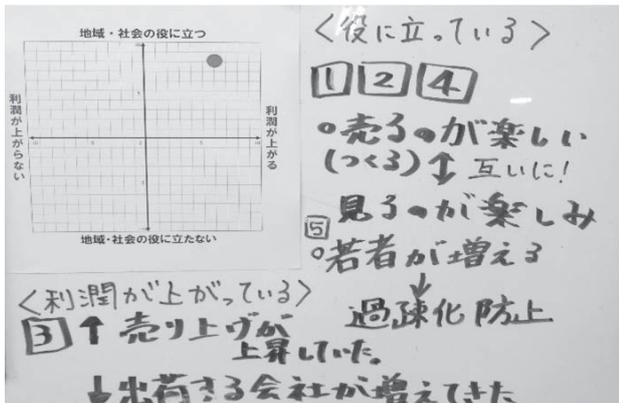


図3 グループの評価結果（いづれ事業）

こうして評価した内容を、第2時では約400字程度の小論文に書く。十分な時間を確保し、じっくりと論述できるようにする。このとき、図4のような型である「小論文の書き方」を示した。大きく三段構成とし、まず結論を述べる。そして、2つの視点から順序立てて述べ、最後にもう一度結論へとという展開になる。

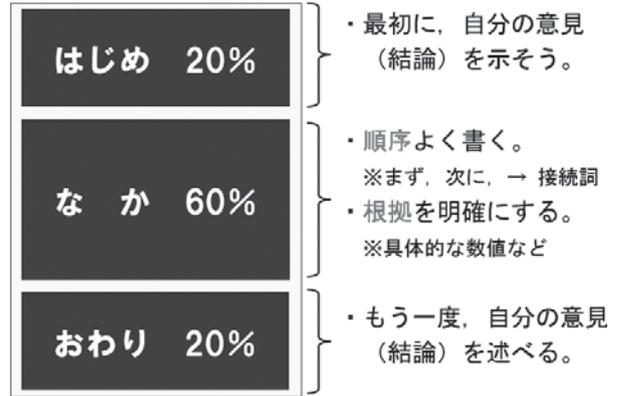


図4 小論文の書き方（型）

図5は、生徒の書いた小論文であるが、図4の型を活用して書いていることが分かる。初めて評価学習に取り組み、書いた小論文にしては論理的に書いているのではないだろうか。この積み重ねが、表現力の育成につながる。

株式会社いづれは、地域社会の役に立ち、利潤も上がっていると思う。

まず、地域社会の役に立っている部分としては、働きやすさが挙げられる。200人以上の農家の方が参加しており、仕事を退職した高齢者が働きやすい環境だと思う。そしてパソコンなども高齢者が使えるように、自立できる取組も行っている。楽しいと感じる高齢者が多く、仕事への意欲を引き出すことにつながっている。また、この会社ができたことによって、若者など労働力人口が増加している効果もある。次に利潤が上がった面では、年々、売上が上がっているが、他社との競争により減少している面もある。しかし、農家個人で見ると1000万円以上稼ぐ農家もありつまものの需要が増え、今後の成長に期待がもてる。

これらの理由から、株式会社いづれは地域の労働力人口の増加を支え、町や会社の利潤を上げることに役立っていると考えられる。

図5 生徒の書いた小論文（いづれ事業）

②「新景観政策」を評価する

京都市では、歴史的な景観の保全に努めるため、平成19年から新景観政策を策定、条例の制定などに取り組む。古の街並みを残し、魅力ある街づくりを目指した取組が行われている。この街づくりには、行政職に従事する人をはじめ、地域住民など多くの

人が関わる。多様な意見をもとに、街づくりが進められる。そこで、近畿地方の単元末に評価学習を位置付け、京都市の新景観政策を評価することとした。なお、評価学習の進め方については、いづれ事業と同じである。

評価する視点としては、「地域住民のため」と「魅力ある街」の2つとした。地方自治は、地域住民によって地域住民のために主体的に運営されるものである。これも、第3学年の公民的分野の学習内容をふまえて設定した。図6は、あるグループの評価結果である。(8, 3)に、評価点が印されている。新景観政策は、魅力ある街づくりにつながっているが、地域住民にとっては、十分に還元されているとはいえないと評価した。

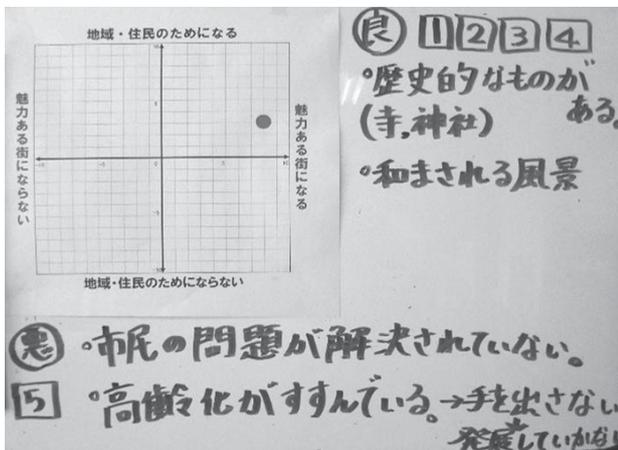


図6 グループの評価結果 (新景観政策)

具体的に「地域住民のため」という視点では、「市民の問題」と「高齢化」という記述が見られる。これは、景観を整備するために電柱の地中化工事を進めた。しかし、一部の地域住民にとっては交通規制など不便を強いられる状態が続き、解消されていない点を挙げている。また、京都市の魅力が上がったことで地価の高騰が生じ、若い夫婦の世帯は市外に家建てる事例もあるようだ。こうした点から、10段階中3という評価をしている。歴史的景観を保全することの意義は大きい。外国からの観光客の増加も見込まれる。しかし、人々の生活も尊重される必要がある。多面的・多角的に思考することができたと考える。なお、次時には「いづれ事業」と同様に、小論文にて評価した理由を書く。

③「南部鉄器」を評価する

東北地方には、いまなお、多くの伝統産業が残る。その一つに、岩手県盛岡市や奥州市で生産される南部鉄器がある。原料となる鉄や木炭、粘土などが豊富に得ることができ、約400年前より製造技術が受け継がれてきた。しかし、アルミニウムの普及に伴って、鉄器の生産量は減少してきた。そうした中でデザイン性の高い製品やIH調理器など、現代の生活環境に合わせた製品づくりにも取り組み、新たな産業振興に挑戦している。伝統的な地場産業としての南部鉄器と、新たな時代に向けた改革に乗り出す南部鉄器という2つの視点から評価し、伝統産業の在り方を考えさせていく。具体的には、「将来的に発展が見込めるか」と「地域にとって必要であるか」という視点を設けた。図7と8は、2つのグループの評価結果である。

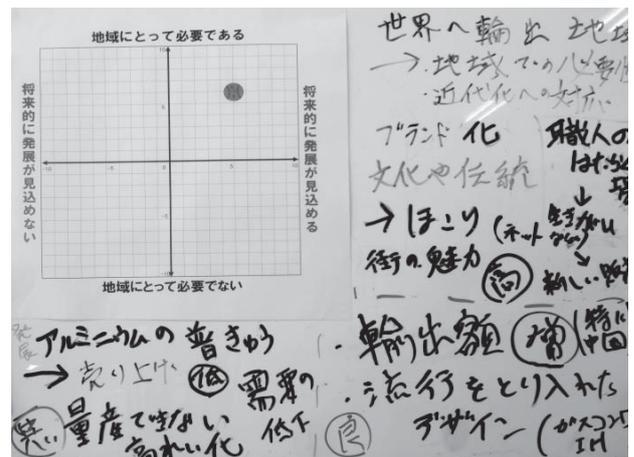


図7 グループの評価結果 (南部鉄器) ①

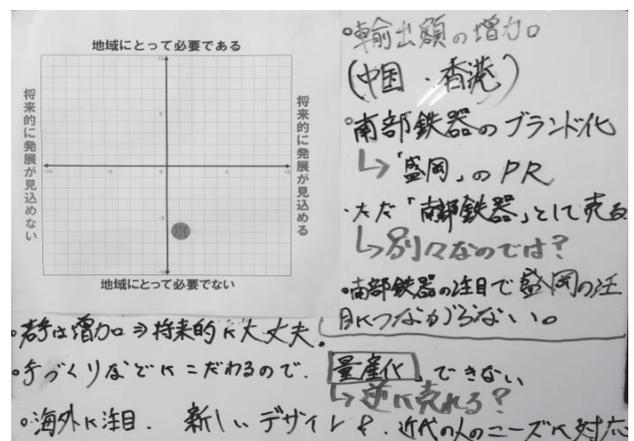


図8 グループの評価結果 (南部鉄器) ②

どちらのグループも、黒く、重い鉄器のイメージ

から、赤や黄など明るいデザインの製品づくりをする新しい試みに対して肯定的な見方を示している。図7の記述には、「ブランド力」という言葉もあり、将来的な発展に期待をもっている。逆に、地域にとっての必要性という点では、グループ間で意見が分かれた。図7のグループは、「ほこり」「街の魅力」という言葉が見られ、南部鉄器という伝統産業が地域にとって欠かせない存在であると考えている。とくに、海外で注目されることで知名度も高まり、地域の誇りとなる。それが地域の魅力になっていくと考えた。評価は、6である。しかし、図8のグループは南部鉄器という知名度は高まるが、盛岡市には有名な農産物をはじめ他の産業も多い。そのため、すぐには結びつかないのではないかと考えた。評価は、-6である。どちらの意見も考え方の違いはあるが、十分に納得できるものであった。こうした仲間の考えを聞くことは、多面的・多角的に思考を深めるといふ社会科の目標に迫ることに通じる。

④「酪農」を評価する

北海道の十勝平野や根釧台地などでは、広大な土地を利用して酪農が盛んである。全国の乳牛の半数以上は、北海道で飼育される。中学生にとっても北海道のイメージは農業。とりわけ、酪農は連想しやすい。緑の牧草が広がる中、乳牛が草を食む風景が思い浮かぶだろう。最北の地でありながら、身近に感じる生徒も多い。飼育される乳牛は、繊細な動物であるとされ、ゆったりとストレスの負荷が少なく、比較的冷涼な気候を好む。生乳量にも大きく影響するため、北海道の自然環境は適地だといえる。評価も「北海道地方に適した産業である」という視点を設けたが、どのグループも高い評価となった。

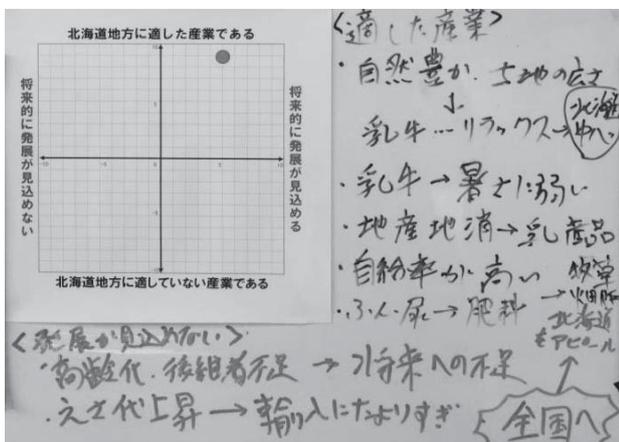


図9 あるグループの評価と意見（酪農）

もう一つは、「将来的に発展が見込める産業であるか」という視点を設けた。この視点に関しては、グループ内で意見が大きく分かれた。図9は、あるグループの評価である。近年、乳牛のえさとなるトウモロコシの高騰をはじめ、農家の高齢化など酪農を取り巻く現状は厳しい面がある。じっさいに、離農者は増加傾向にある。しかし、生乳・乳製品の食料自給率は65%ほどで、米と野菜に次いで高い。長期的にも安定して需要が見込まれる産業であると考えた。また酪農は、乳牛の糞をたい肥として利用し、牧草をそだてる。そして良質なエサとなり、再び乳牛へと還元される。こうした循環型農業のモデルとしても注目されている。図9のグループは、北海道地方の酪農が経営上、厳しいことを理解しつつ、将来性という視点については評価を5とした。後継者不足というマイナス面と循環型農業というプラスの面とで、どちらを重視して評価するのか意見が分かれた。そこに、議論がうまれる。その議論を通して、思考は深まっていくのである。図9のグループは、結果としてプラスの面を大きく評価したことになる。なお図10は、評価学習で使用する学習プリントである。左が評価表、右が小論文の用紙となっている。

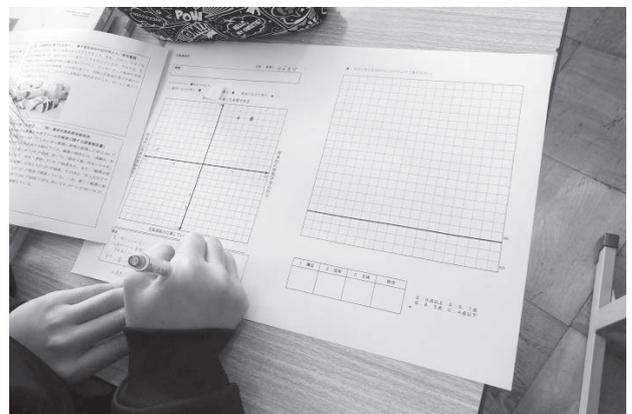


図10 学習プリント

4. 検証

生徒の思考力・判断力・表現力の高まりを、ルーブリックと定期テスト、本県が独自に実施する児童生徒の学習状況調査（平成27年1月実施）の3点から検証していった。

(1) ルーブリックによる評価

毎時間、論述した小論文をルーブリックによって評価する。ルーブリックとは、表現物を評価するための指針である。小論文には、評価学習を通して導

き出した結論に対する理由が書かれている。そこから多面的・多角的な思考や、習得した知識の活用度などが見えてくる。さらに、文体や語句の表現の仕方なども評価が可能となる。評価することで、指導する側にとっても指導内容が明確になるだろう。また、生徒にとっても自ら書いた小論文の何がよくて、何が足りないのかが明確となる。よさを認められれば、学習に対しての意欲は喚起されていく。また、何が足りないのかという課題点も明確になることで、努力すべき見通しをもつことにつながる。同様に、学習意欲の喚起につながるだろう。見通しもなく、ただ闇雲に努力することは無力感だけを生む。無力感は、学習意欲を欠如させる。

表3 ルーブリック (小論文用)

	A 論理構成	B 習得知識の活用	C 文体
3	文章全体を通して、「型」を活用するとともに、論理的で説得力のある文章になっている。	授業で習得した知識を活用するとともに、肯定・否定の意見を含んでいる。	用語の使い方や意味に誤りがなく、適切である。
2	論作文の「型」を活用している。	授業で習得した知識を活用している。	文末の語尾表現がそろっている。(敬体と常体が統一)
1	論作文の「型」を活用していない。	授業で習得した知識や用語を活用できていない。	書き言葉ではなく、話し言葉で書いている。

表3は、小論文の評価に活用したルーブリックである。評価する観点を複数決め、その観点ごとに到達段階を設定する。A論理構成、B習得知識の活用、C文体という3つの観点を設けた。そして、その観点ごとに到達段階を3段階に分け、明示する。第3段階まで到達できれば3とし、すべての観面で3となれば、合計値は9となる。表4は、4回の評価学習の学級平均である。

表4 ルーブリックの結果 (学級平均)

	1回目 中国・四国	2回目 近畿	3回目 東北	4回目 北海道
平均	6.0	6.4	6.6	7.0

1回目の平均は6.0であったが、回数を重ねるごとに数値は上がり、4回目には7.0となった。1回

目から、1.0の上昇である。小論文の内容が高まったといえるだろう。そして、それは確かな表現力の育成につながったと考える。

(2) 定期テストの結果

定期テストでは、観点別に問題を設定している。その中で、思考力・判断力・表現力を問う問題の正答率を比較する。本校は3学期制であり、各学期に1回ずつ定期テストが実施される。表5が、その結果である。1学期では、62.5%だったものが、2学期には70.0%へ上昇している。3学期は、2学期とほぼ変わらず、69.4%となっている。1学期から2学期にかけて、思考力・判断力・表現力が高まったことの流れであり、年度末にかけて持続することができたと考える。

表5 定期テストの思考力・判断力・表現力観点の正答率

	1学期	2学期	3学期
学年平均 (%)	62.5	70.0	69.4

(3) 県学習状況調査の結果

最後に、本県が独自に実施した学習状況調査の結果から検証する。県内の第2学年の中学生が対象であり、問題は大きくAとBの大問からなる。Aは基礎的な知識を問う問題であり、Bは習得した知識の活用を図る問題である。思考力・判断力・表現力は、主にB問題に含まれており、この結果から検証する。たとえば、「グラフをもとにブラジルの輸出品目の変化について考える問題」や「楽市・楽座を行った理由を、税と商工業をかかわらせて考える問題」などが出題されている。表6は、県と本校の生徒のB問題(正答率)を比較したものである。

表6 県学習状況調査の正答率の比較

	県全体	本校
県全体の正答率を100とした場合	100	128

県平均正答率を 100 とした場合、本校は県平均を大きく上回る 128 であった。大きな差だと考える。なお具体的な数値は控えるが、複数の学校の結果と比較しても、本校の正答率の高いものであった。以上、3 点の結果から本実践で取り組んだ評価学習は、思考力・判断力・表現力の育成に有効であったといえる。

5. おわりに

思考力・判断力・表現力の育成をめざした社会科学学習の一つとして、評価学習を提案した。実践した授業者としても手応えを感じている。生徒が資料を読み込む姿や、二次元軸表に評価点を印そうと考える姿からは、深い思考ができていていると感じた。それは、思考するに十分な社会的事象を取り上げたこと。そして、二次元軸表に評価点を 1 点印すという判断を迫る場面が、有効にはたらいたと思われる。さらに、十分に考え書く時間の確保と、表現の型を示したことで論理的な小論文を書くことにつながった。作文が苦手という生徒も多い。当初、そうした生徒は筆が進まず、じっと紙面を見つめていた。しかし、4 回目にもなると、すらすらと筆を走らせて書くことができるようになった。十分な思考と書き方という表現の型があったからに他ならない。そして何より「書くことが、楽しくなった。」と答えた生徒がいたことが、印象的だった。評価学習を位置付けることで、生徒の意欲喚起にもつながり、思考力・判断力・表現力の高まりへと相乗的に好循環を生み出すことにもつながった。多くの学校で実践されることを期待する。

参考資料

「平成 26 年度 岐阜県における児童生徒の学習状況調査《社会》」

岐阜県総合教育センター ホームページ